過去 10 年の歩み–概観–

鈴木 久敏*

Progress over the past 10 Years – Overview –

Hisatoshi SUZUKI

Abstract– The Transdisciplinary Federation of Science and Technology (TraFST) is celebrating its 20th anniversary. This paper provides an overview of the progress of TraFST over the past 10 years.

Keywords– TraFST, 20th Anniversary, Progress, Trends

横幹連合は 2003 年 4 月に設立され，様々な方面からご支援を受け，この程めでたく 20 周年を迎えました．この間，逸早くコトづくりや横断型基幹科学技術の重要性を訴え，社会や企業の価値観の転換に大きく貢献して来ました．2013 年には 10 年間の活動を総括し，会誌「横幹」の第 7 巻第 1 号及び第 2 号で特別企画「横幹連合: 10 周年を迎えて」を特集し，また 10 周年史「横幹連合 10 年の歩み」[1] をホームページで公開して来ました．

さて，本稿では 20 周年を迎えた横幹連合が，2013 年以降の直近 10 年間に何を行い，何を成し遂げたかを顧みて，次の 10 年間の活動の指針にしていただきたいと思います．詳細は本特集号の発刊に併せてホームページで公表される予定の記録「過去 10 年の歩み」[2] に譲るとして，その概観を **Fig. 1** の「横幹連合の歩み (2013〜2022)」に沿って報告します．

この 10 年間の活動は大きく 6 つに分類できます．それは，全体・総務，企画・事業，学術・国際，産学連携，広報・出版，会誌編集の 6 つです．それぞれのカテゴリごとに,「定常的（前の 10 年間から継続している定期的な取組み）」,「新規継続（この 10 年間に新たに開始し，今後も継続する取組み）」,「単発的」の 3 つの視点で分類したのが **Table 1** です．

Table 1 の学術・国際カテゴリの中の「調査研究」に関しては，調査研究会の制度自体は定常的に存在するものですが，個々の調査研究会は設置期間が有期で，この 10 年間にシステム統合学，リスクマネジメント，横幹人材育成，オープンデータ，JST 未来創造事業，文理融合 FS，第 4 次産業革命とシステム化，SDGs，多価値共創，DX の 10 テーマを設置しました．テーマ自体は，会員学会から発案されたものもあれば，企画・事業委員会での取り組みが元で調査研究会へと発展したものがあります．

こうして観てくると，先の 10 年間に始まった横

Table 1: Classification of major activities over the past 10 years.

カテゴリ	定常的	新規継続	単発的
全体・総務	木村賞 CSTI 対話・提言 会員学会会長訪問	新型コロナ感染症対応	事務所移転 ORCID 連携模索
企画・事業	横幹会議	Future Earth Society 5.0 SDGs コトつくり至宝発掘 横幹図改訂	新型コロナ感染症対応調査研究会企画
学術・国際	調査研究 横幹コンファレンス 日本学術会議連携 国際活動模索 防災学術連携体参画		JICA 連携
産学連携	横幹協議会 横幹フォーラム 横幹懇談会	協議会新会員制度 システムイノベーションセンター設立	
広報・出版	ニュースレター編集	図書出版：＜知の統合＞シリーズ	ゆるキャラ
会誌編集	会誌編集・刊行	会誌オープンアクセス化	

*20 周年記念事業実行委員会委員長

Received: 1 November 2023.

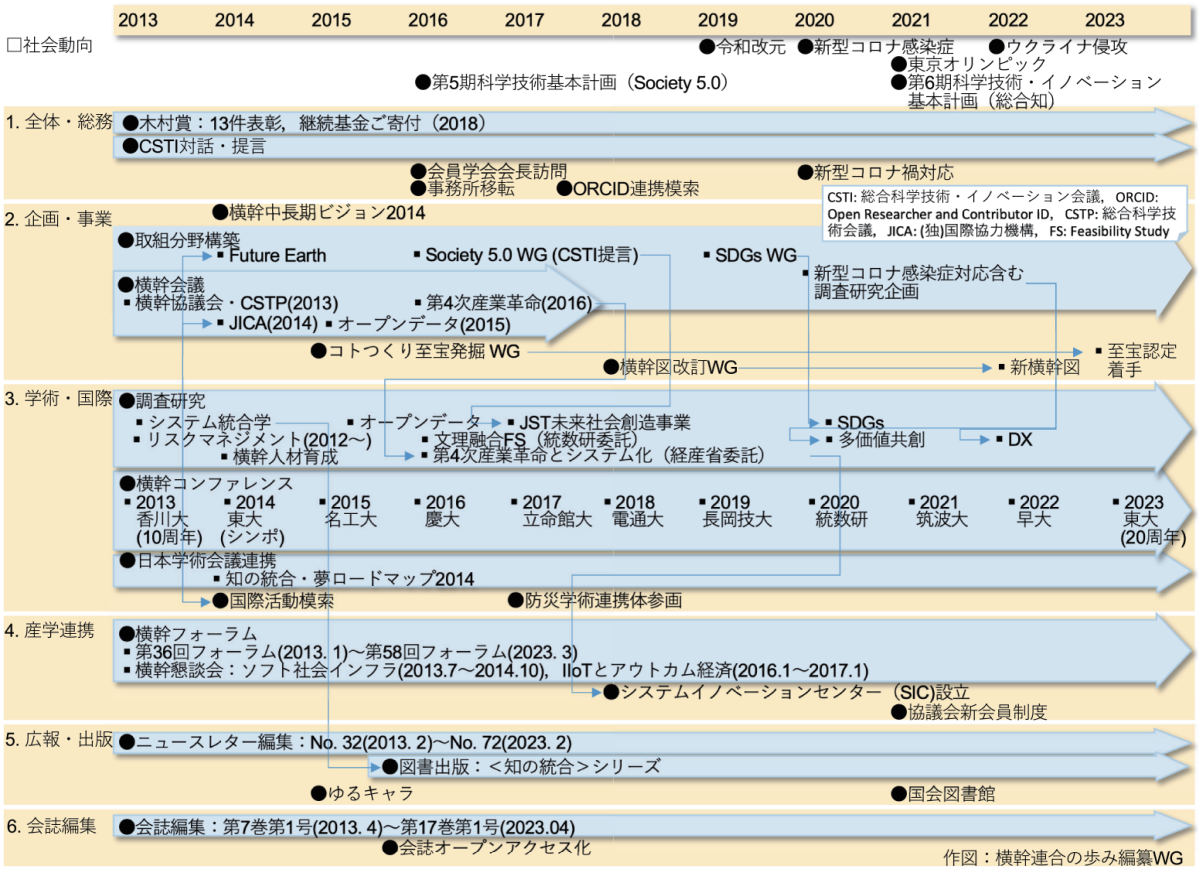

Fig. 1: Progress of the TraFST (2013-2022).

幹連合としての基盤的な活動を引き継ぎながら，この 10 年間は様々な新たな取り組みを開始し，次への展開を探ってきたと言えます．そのような方向性で活動を行えたのは，最初の 10 年間がコトづくり宣言や「横断型基幹科学技術とは何か?」と言った横幹連合の理念構築の時代であったのに対して，いよいよその理念を実践に移すべき時代だと認識し，2014 年に纏めた「横幹連合中長期ビジョン 2014～理念から実践へ～」[3] に沿って活動が行われてきた結果といえます．

また，歴代の役員・委員の方のご尽力はもとより，このような活動が行う基盤としてある程度の規模の会員組織や財務状況が確保できていたという背景もあります．この 10 年間の会員数と財務状況を見ていくと，**Fig. 2** と **Fig. 3** のようになります．

横幹連合は学術団体である学会の集まりで，正会員は学会それ自身となるため，会員数はそれほど大きな数字ではありません．Fig. 2 の過去 20 年

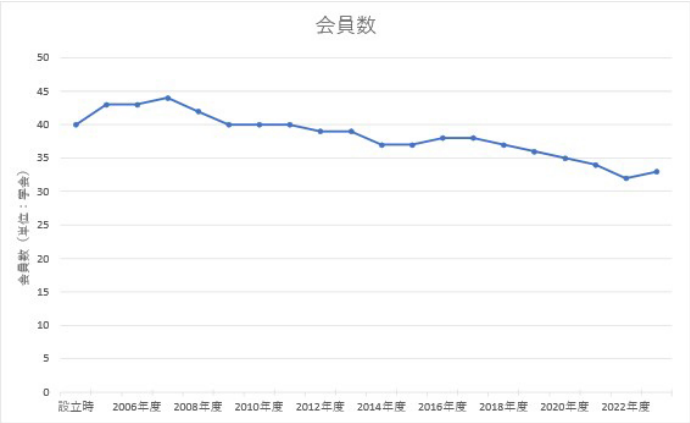

Fig. 2: Trends in the number of members of the TraFST.

間の会員数の増減を見ると，設立時に 40 学会あったものが，直近の 10 年間は 40 学会を少し下回る形で，しかもいくぶん減少傾向で推移しています．これには二つの要因があると思います．一つは，設立時には，熱気に包まれ様々な期待を持って横幹

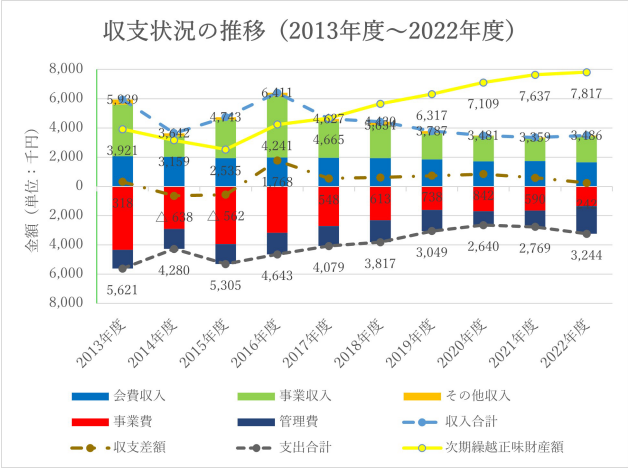

Fig. 3: Trends in the income and expenditure status of the TraFST.

連合に参集してきた学会にとって，横幹連合の活動が当該学会の活動の直接的メリットに繋がっていない，会員学会の期待に十分応えられていないという状況があるかと思います．二つ目は，社会経済状況の悪化で，いずれの学会も財務的に苦しく，横幹連合への会費支出を抑制する傾向が出てきたことです．今後は，この辺の不満・不安を取り除く取り組みが求められることになります．

次に，Fig. 3 が直近 10 年間の横幹連合自身の財務状況です．受託研究等の事業収入の多寡により多少の凸凹はありますが，最近は苦しいながらも安定した財務状況を見て取れます．一見すると，事業費が大幅に削減され，活動が縮小しているかのように見えますが，実態は会誌刊行の電子化を進め，さらにここ数年は新型コロナ感染症対策で横幹コンファレンスのオンライン開催への転換などにより，活動レベルは維持しつつ，経費削減を図ることができたことが大きな理由です．Fig. 3 では見難いですが，黄色の折れ線が正味財産です．正味財産は順調に伸びてきていますので，この貯えを基金として次の発展に繋がる活動を考えていくべきと思います．

参考文献

[1] 横幹連合ホームページ資料 10 周年史,「横幹連合 10 年の歩み」, 横幹連合 10 年史編纂委員会編, 2013 年 10 月. https://www.trafst.jp/History/Ten_Year_History/Ten_Year_History_of_Trafst.pdf

[2] 横幹連合ホームページ資料 20 周年史,「過去 10 年間の歩み」, 横幹連合 20 周年記念事業実行委員会横幹連合の歩み編纂 WG 編, 2024 年 3 月公開予定.

[3] 鈴木久敏，山本修一郎，本多 敏，庄司裕子,「横幹中長期ビジョン 2014 について」, 横幹第 9 巻第 1 号, pp. 20-26, 2015 年 4 月.

鈴木 久敏

1948 年生．76 年東京工業大学大学院理工学研究科博士課程経営工学専攻単位取得退学．93 年筑波大学社会工学系教授，2001 年同ビジネス科学研究科長，09 年同理事・副学長，15 年情報・システム研究機構監事．現在，筑波大学名誉教授．組合せ最適化，経営科学，ビジネスゲームなどの研究に従事．工学博士．日本オペレーションズ・リサーチ学会，日本経営工学会などの会員．16～18 年横幹連合会長．